

引用の構文に関する覚書

——発話行為的引用論のために——

中 園 篤 典

(受付 2005 年 5 月 10 日)

1. はじめに

本稿の目的は、思弁的に傾きがちな発話行為（言語行為）論¹⁾に言語データ（統語論）による検証を導入することである。筆者は中園（1994, 2002, 2003, 2005）における引用研究を通じて、再現性のある実証的なデータに基づいた新しい知見を発話行為論に提供することを試みてきた。その際に用いる言語データは、日本語の引用、特に引用されたダイクシスである。本稿では、筆者が試みる「発話行為から見た引用論（発話行為的引用論）」の予備的な議論として、引用の構文が持っている特殊な構造を概観したい。そして、その特殊な構造を利用して何を明らかにしたいかを述べて、発話行為的引用論の全体像を素描する。

2. 本稿が扱う「引用」

2-1 引用とは

話し手が第三者の発話を伝えることを引用といい、そのために用いられる言語形式を「引用の構文²⁾」という。筆者が試みる「発話行為的引用論」は引用句³⁾と引用動詞を備えた次のような引用の構文を扱う。

[主語] が/は +	「引用句」と (引用部)	+	「引用動詞」 (伝達部)
------------	-----------------	---	-----------------

図①

- 1) 言語学では“speech act”を「発話行為」と訳するのが一般的であるので、本稿でもこれに従う（毛利（1980）、山梨（1986）、深谷・田中（1996）等）。なお、言語哲学では「言語行為」と訳するのが一般的なので注意が必要である（坂本（1977）、土屋（1980）、山田（1987）等）。
- 2) 第三者の発話を伝える文全体は、単に「引用」とする他に、「引用構造文」（奥津（1970））、「伝達文」（遠藤（1982））、「引用文」（砂川（1989）、中園（1994））、「引用表現」（鎌田（2000a））、「引用構文」（藤田（2000d））とも呼ばれる。
- 3) 引用される文は、単に「引用節」「引用句」とする他に、「被伝達文（Reported Speech）」（細江（1971））、「被伝達部」（豊田（1993））、「引用成分」（森山（1988））、「引用部（quoted part）」（廣瀬（1988）、山梨（1991）、福寫（1997））、「引用文」（奥津（1970）、仁田（1980）、遠藤（1982）、岩男（2003））とも呼ばれる。

本稿が扱う「引用」とは、誰かの発話を引いてなされる次のような発話である。例えば、元の発話(1)を引いてなされる現在の発話(2)をいう。

(1) お母さん「あの子またきつとこの家遊びに来ますわ。」(『チエ3』)

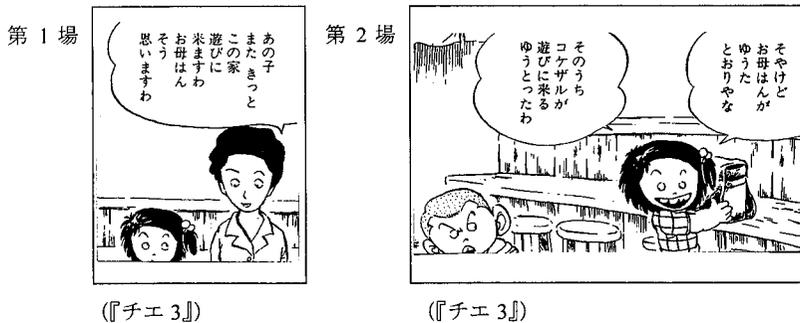
(2) そのうちコケザルが遊びに来るゆうとったわ。(『チエ3』)

また、元の発話(3)を引いてなされる現在の発話(4)をいう⁴⁾。

(3) 花井先生「お前のアルバムが見たい。」

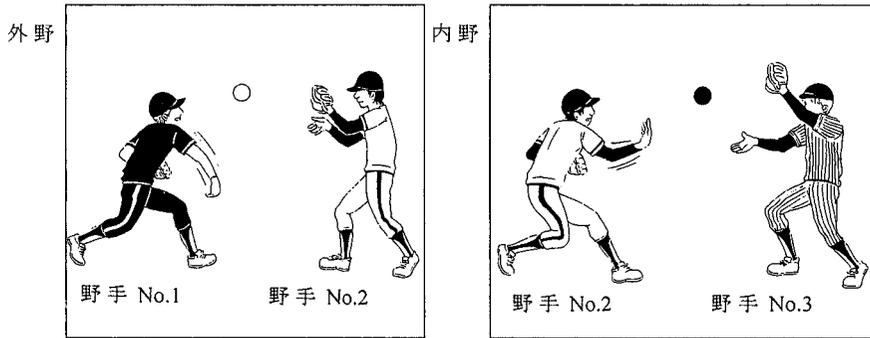
(4) センセはボクのアルバムが見たいてゆうたけど…。(『チエ14』)

通常の文は、話し手の経験を言語形式ののっとして発話する。それに対し、引用の構文は話し手の発話を聞き手が元の発話場面(第1場 1st field)⁵⁾で受け取ることがまず前提となる。そして、その聞き手が今度は話し手、すなわち伝達者となり、元の話し手の発言内容を現在の発話場面(第2場 2nd field)⁶⁾で伝達する。元の発話(1)とその引用である現在の発話(2)を例に、その構造を図示すると次の通りである。



時間的に前後する2つの場(field)から構成される引用の構文を、奥津(1970)は「ブラウン管に映る映像」にたとえている。本稿では、これを次の通り野球にたとえてみた⁷⁾。

- 4) 元の発話が作品中に明示されていない場合は筆者による類推をあげる。
- 5) 「元の発話場面(第1場)」は、「発話の場(communication field), ゼロ次の場(0th field)」(奥津(1970)), 「第一の場」(遠藤(1982)), 「発言₁の場」(砂川(1988)), 「元話者を取り巻く場(原発話の場)」(鎌田(2000: 65))とも呼ばれる。
- 6) 「現在の発話場面(第2場)」は、「地の文の発話の場, 別の次元の場(1st field)」(奥津(1970)), 「第二の場」(遠藤(1982)), 「発言₂の場」(砂川(1988)), 「伝達者を取り巻く場(伝達の場)」(鎌田(2000: 65))とも呼ばれる。
- 7) イラストはNico氏(フリー漫画家)による。



図③

図③は、野手 No. 1 から野手 No. 2 の中継を経て野手 No. 3 へ投げられるボールのリレー（リレー型⁸⁾）を表している。上図の「外野」は第1場、「内野」は第2場をそれぞれ比喩的に表す。外野の「○」は野手 No. 2 による中継前のボールであり、引用における「元の発話」を表す。内野の「●」は野手 No. 2 による中継後のボールであり、引用における「現在の発話」を表す。また、野手は引用における会話の参加者と次のように対応する。

野手 No. 1 … 元の話し手（話し手 1）⁹⁾

野手 No. 2 … 伝達者（聞き手 1¹⁰⁾、話し手 2¹¹⁾）

野手 No. 3 … 聞き手 2¹²⁾

図②を例にすると、話し手 1 は「お母さん」、聞き手 1 でもある伝達者（話し手 2）は「私」、聞き手 2 は「コケザル」となる。なお、現在の発話である(2)(4)を引用の構文（言語データ）として扱うときは、次のように主語・目的語を補足，方言等のスタイルを解除して掲げる。

(2)' お母さんは私に そのうちコケザルが遊びに来ると言った。

(4)' 先生は私に 私のアルバムが見たいと言った。

8) 野球用語では「ボール回し」と呼ばれる。

9) 「元の話し手（話し手 1）」は、「元発言者（First Speaker）」（細江（1971））、「Sp₀」（奥津（1970））、「話し手（発話者，思考者，経験者）」（久野（1978））、「第一の話し手」（遠藤（1982））、「話し手₁」（砂川（1987））、「元話し手（SP₋₁）」（堀口（1995））、「原発話者」（藤田（2000d））、「元話者」（鎌田（2000a））、「山内（2002））、「岩男（2003））、「原話者」（渡辺（2003））とも呼ばれる。

10) 「聞き手 1」は、「元聴者（First Hearer）」（細江（1971））、「H₀」（奥津（1970））、「聞き手₁」（砂川（1987））、「元聞き手（H₋₁）」（堀口（1995））、「元聞き手」（鎌田（2000a））とも呼ばれる。

11) 「伝達者（話し手 2）」は、「元聴者（Reporter）」（細江（1971））、「Sp₁」（奥津（1970））、「第二の話し手（伝達者）」（遠藤（1982））、「話し手₂」（砂川（1987））、「報告者」（中園（1994））、「現話し手（SP₀）」（堀口（1995））、「全文の話し手（引用者）」（藤田（2000d））、「伝達者」（鎌田（2000a））、「山内（2002））、「話し手」（岩男（2003））、「引用者」（渡辺（2003））とも呼ばれる。

12) 「聞き手 2」は、「被伝達者（Reported Party）」（細江（1971））、「H₁」（奥津（1970））、「第二の聞き手」（遠藤（1982））、「聞き手₂」（砂川（1987））、「現聞き手（H₀）」（堀口（1995））、「聞き手」（岩男（2003））とも呼ばれる。

2-2 引用構造

2-2-1 リレー型の引用

本稿の分析対象は、図③で示したような「リレー型の引用」である。すなわち、第1場で話し手1の伝達内容を受け取った聞き手1がそれを解釈し、第2場において伝達者（話し手2）として聞き手2に伝える構造である。

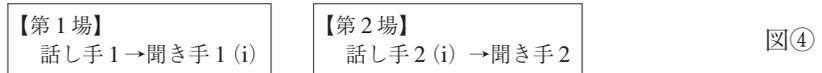
- (5) a. 太郎は私に「君は何も分かっていない」と言った。
 b. 太郎は私に 私は何も分かっていない と 言った。

これら引用の表現は、次のように公式化できる。

- (6) [話し手1] は [伝達者] に [X は Y] と 言った。

話し手1…太郎 伝達者(話し手2)…私

その「引用の構造¹³⁾」は、次のように図式化できるだろう¹⁴⁾。



本稿は、図④の構造をもち、元の発話の内容が第2場の参加者（伝達者・聞き手2）に関わっている引用の構文を扱う。例えば、冒頭にあげた元の発話(1)(3)はその内容が次のように第2場の参加者に関わっており、筆者の分析対象となる。

- (1)' お母さん「あの子（聞き手2）はきっと遊びに来る。」
 (3)' 花井先生「お前（伝達者）のアルバムが見たい。」

その利点は、内省を使った思考実験において、次に見られるような第2場におけるダイクシスの調整を観察できることである¹⁵⁾。

- (7) a. お母さんは私に あの子がきっと遊びに来る と 言った。
 b. お母さんは私に あなたがきっと遊びに来る と 言った。
 (8) a. 先生は私に お前のアルバムが見たい と 言った。
 b. 先生は私に、私のアルバムが見たいと 言った。

筆者が試みる「発話行為的引用論」は、図④の構造を持つ引用の構文を扱い、特に引用句

13) ここでいう「引用の構造」とは、引用表現を生み出す言語外の要因（話し手、聞き手）の相互関係を言う。構造言語学的な言語表現の構造（例えば「引用構文の構造」）の意味ではないので注意。
 14) 図③の「i」は“identical”を意味する（「聞き手1」と「伝達者（話し手2）」が同一人物）。なお、引用の構造の図式化には、奥津（1970）、砂川（1987）、内田（1992: 124）、山口（1992: 292）、堀口（1995）、藤田（2000d: 72）等を参照。
 15) (i) はその発言内容に第2場の参加者は関わらないが、図④（リレー型）を形成している。
 (i) ずいぶん昔のことになるが、川端康成先生がこんな話をしてくれた。外国旅行をしていると、六歳か七歳の少女が飛行機に乗っていた。（中略）川端先生は、その少女の態度が実に毅然としていて美しかったと言われた。（『礼儀』）

のダイクシスに焦点を当てて検討を行うものである¹⁶⁾。

2-2-2 様々な引用の構造

もちろん、引用の構造は多様であり、リレー型の引用だけでなく様々なバラエティがあり得る。例えば、次のような引用は図④には当てはまらない。

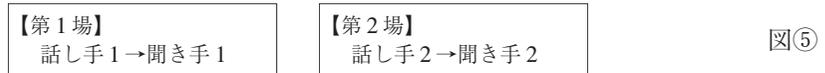
- (9) a. 太郎は次郎に「君は何も分かっていない」と言った。
 b. 太郎は次郎に彼は何も分かっていないと言った。

これら引用の表現は、次のように公式化できる。

- (10) [話し手1]は[聞き手1]に[XはY]と言った。

話し手1…太郎 聞き手1…次郎

その引用の構造は、第1場の事実を伝達者が単に第2場の話し手2として報告するものである。これを次のように図式化しておく。



図⑤は、図④から「i」を外した構造である。本稿が扱うリレー型ではない点に注意されたい。図④と図⑤の違いは、伝達者の発話が直接経験に基づくか、伝聞に基づくかの違いである。したがって、次のように言語的に区別することが可能である¹⁷⁾。

- (11) a. *太郎は私に「君は何も分かっていない」と言ったららしい。
 b. *太郎は私に 私は何も分かっていないと言ったららしい。
 (12) a. 太郎は次郎に「君は何も分かっていない」と言ったららしい。
 b. 太郎は次郎に 彼は何も分かっていないと言ったららしい。

図⑤の構造をもつ引用は、新聞等における事実の報告や小説の地の文などに頻出する。

- (13) おみやが、野中さまと云った。どうか止めて下さいまし、どうか兄を止めて下さいましと云いながら、けんめいに六郎兵衛の腕にしがみついていた。(『樅』)

上の例では、話し手1は「おみや」、聞き手1は「野中さま」、伝達者(話し手2)は文全体の発話者(書き手)である「作家」、聞き手2はその「読者」である。

16) 第1場の参加者が役割を入れ替えて第2場の参加者となる場合(第1場の話し手1が第2場の聞き手2になる構造)も、リレー型の引用と言える。

(i) 俊夫「よく出てきてくれたな。お前たちもぶち殺してやる。」
 デス「ほくたちを殺すというのか。ほくたちが何をしたというんだい。」(『デス』)

17) 図④と図⑤の違いに関する用例。

(i) ある時、大場の防衛戦のテレビ放送に、引退した海老原博幸さんがゲスト解説で出演したことがあった。そこで海老原さんは「大場にはあまりパンチがない」というようなことを言ったららしい(図⑤)。後に誰かからそのことを聞いた大場が「あの人がやりたいというなら自分はいつだってやってやる」と驚くような激しさで呟いたことがあった(図④)。(『ジム』)

引用の構文には、他にも様々なバラエティがあり得るが、本稿ではこれら引用のバラエティは扱わない。筆者が試みる「発話行為的引用論」は、第1場でコミュニケーションの参加者であった聞き手1が、第2場で今度は伝達者（話し手2）となって元の発話を引用するリレー型の引用（図④）のみを扱う。

発話行為的引用論は伝達者が「元の発話をどのように解釈するか」という言語外の要素に着目し、それが現在の発話である引用の構文にどのような影響を与えるかを考察する。その考察を行うにあたって、リレー型の引用（図④）がもっとも適しているからである¹⁸⁾。

2-3 伝達者による間接化

2-3-1 伝達者の解釈

通常の発話において、話し手は必須だが、聞き手は必ずしも必須ではない。通常は文の成立にコミュニケーションの成否は関わらない¹⁹⁾。ところが、伝達者の存在を前提とする引用の構文では、第1場で話し手1と聞き手1の間にコミュニケーションが成立していることが文成立の前提となる。これは図③において、野手 No. 1（話し手1）と野手 No. 2（聞き手1）の間でキャッチボール（コミュニケーション）が成立していなければ、3人の連係プレー（引用）が成立しないのと同じである²⁰⁾。

さて、野手 No. 2 の中継を経ていたとしても、投げられるボール自体は同じであるように、

18) 図⑤の構造を持つ引用でも、その発言内容が第2場の参加者に関わる場合は次のように引用句でダイクシスが調整される。

(i) クラハドール「明日の朝だ。ジャンゴ。夜明けとともに村を襲え。村の民家も適度に荒らしてあくまで事故を装いカヤお嬢様を殺すんだ。」『piece3』

ウソップ「お前はダメされてたんだ。あの執事は海賊だったんだ。そして明日の夜明けに仲間の海賊が押しよせてお前を殺すと言ってた。」『piece4』

19) 例えば、独白や次のような場合など。

(i) おれは頭の中で坊やに話しかけた。“ほらほく見てごらん。おさるさんだぞ。(中略) おじさんだって子供の頃はほくといっしょで桃みたいな色してたんだけどな。”（『バー』）

20) 引用の構文では、聞き手1（野手 No. 2）は必須であるが、聞き手2（野手 No. 3）は任意である（いなくても成立する）。このことから、引用の構文が第1場のコミュニケーションを含んだ言語形式であることが分かる。



（『チエ 13』）



（『チエ 13』）

引用される発話も伝達者の中継を経たとしても発言の意味内容は変わりがない²¹⁾。ただし、投げるボールのスピードや球筋などが野手によって異なるように、話し手1の発話を受けた伝達者がそれをどう引用するかには、さまざまな言語および言語外の要素が関係してくる²²⁾。次の例をご覧ください。



図⑥

『日の出』

このとき、元の発話は話し手1（桑田先生）による次の発話である。

(14) 桑田先生「お嬢さんをお嫁にください。」

ところが、それをどう引用するかは伝達者（美津子の母、美津子の友人）によって次の通り異なる。

(15) a. 桑田先生は 美津子を嫁にくれ と言った。

b. 桑田は ミッチャンを嫁にくれ と言った。

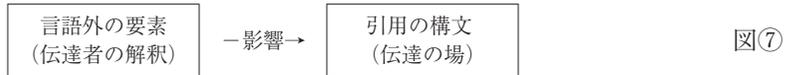
なお、(15)a が美津子の母による引用、(15)b は美津子の友人による引用である²³⁾。このとき、元の発話の「お嬢さん」が、彼女の母による引用では「美津子」、彼女の友人による引用では「ミッチャン」と変化している。またどちらの伝達者も元の発話の「ください」を「くれ」に変えて引用している。

2-3-2 引用の動的な側面

引用の構文は、第1場という言語外の要素（話し手1と聞き手1のコミュニケーション）

- 21) 図③では引用されても意味内容が変わらないことを、外野と内野でボールの円形が変化しないことで示している。
- 22) 図③では引用されることで伝達者の解釈が加わることを、外野と内野でボールの色が○（白）から●（黒）へ変化することで表している。
- 23) 正確に言うと(15)bは図⑤の構造を持つので、次のように言い換えられる。
 (i) 桑田は ミッチャンを嫁にくれ と言ったらしい。

を必然的に取り込むことになる。元の発話における言語外の要素が現在の発話に関与するの
が引用の構文の特徴である。結果的に、第1場におけるコミュニケーションのあり方が第2
場における引用の構文に様々な影響を与えることとなる。図示すると次の通りである。



引用の構文は、第1場（元の発話場面）のコミュニケーションを第2場（現在の発話場面）
において伝達者がどう伝えるかを表す言語形式である。そこで特徴的なのは、この伝達者（話
し手2）の介在である。こうした伝達者による元の発話の解釈を引用における「伝達者の解
釈」とする²⁴⁾。また伝達者の解釈の言語的な反映を「間接化」と呼ぶ²⁵⁾。

こうした引用の動的な側面を扱うのに、単なる記述を目的とする国語学の枠組みでは扱え
ないとするのが筆者の立場である²⁶⁾。また、統語論の自律をテーゼとする理論言語学の枠組
みでも扱えないと考えている。

鎌田（2000a: 92）は、この動的な側面を「日本語の引用表現は、元々のメッセージを新た
な伝達の場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まる」とす
る。そして、これを「引用句創造説」として議論の中心に据えている²⁷⁾。

筆者も、言語に対する機能的な立場から引用の構文を扱いたい。すなわち、言語使用の問題
として引用を捉え、言語外の要素²⁸⁾が引用の構文にどう反映されるか、その全体像を明ら
かにすることを目指したいと思う。

3. 引用の分析

3-1 二つのレベル

引用の構文が言語的に特殊な問題を含んでいることは、古くから論じられてきた。例えば、
次の(16)は二通りに曖昧である。

(16) 太郎は私に 私は何も分かっていない と言った。

24) 「実際にコトバを引用し、あるいは、そういった形とった表現を用いるのに際しての話し手（引用者）の理解・解釈などの介在による干渉の問題」（藤田（2000a））。

25) 「間接化 (indirectification)」(奥津 (1970))。

26) 藤田（1995, 2000d: 146–178）は、この動的な側面（全文の話し手の解釈の関与）を「話し手投射」と呼び、「引用表現の引用されたコトバの変容－非変容の現象」は語用論の課題としている。

27) 「元発話の持つ「意図」が何であるかを理解するのは、その発話の聞き手、つまり、引用を行う伝達者ということである。そして、その「意図」をどう表現するかは伝達者の伝達の場における「表現意図」によって決まる、というのが「引用句創造説」の根本と言えよう。」（鎌田（2000a: 63））

28) 話し手の意図、聞き手の解釈、発話行為の遂行など。

すなわち、伝達者の解釈次第で引用句の「私」は、(17)aのように太郎（文全体の主語）を指すこともあれば、(17)bのように伝達者（文全体の話者）を指すこともある。

- (17) a. 太郎 t は私 i に 私 t は何も分かっていない と言った。
 b. 太郎 t は私 i に 私 i は何も分かっていない と言った。

前者はいわゆる「直接引用の読み」である。このとき、引用句の「私」と同一指示なのは文全体の主語（「太郎」）である。（引用句の「私」と文全体の話者は別指示である。）一方、後者はいわゆる「間接引用の読み」である。このとき、引用句の「私」と同一指示なのは文全体の話者（「私」）である（引用句の「私」と文全体の主語は別指示である。）

この二義性は、現在の発話に時間的に先行する元の発話(18)とそれを引用する現在の発話(17)という二つのレベルを立てることで説明できる。

- (18) a. 太郎「私 t は何も分かっていない。」
 b. 太郎「君 i は何も分かっていない。」

引用の構文は時間的にそれに先行する元の発話とそれを引用する現在の発話から構成されている。図示すると次の通りである。



このように引用の構文を二つのレベルの合成であるとする見方は我々の言語直観に合致するが、次に問題となるのはこれを言語研究の中でどう位置づけるかである。

3-2 直接話法分析

久野（1978）の「直接話法分析²⁹⁾」は、引用の構文の深層構造に元の発話（直接話法表現³⁰⁾）を仮定することにより、表層の引用句に表れる統語現象を説明しようとする立場である。久野（1978）は「引用動詞³¹⁾は深層構造において目的節に主語の内部感情の直接話法表現をもっている」とする。つまり、(19)は深層構造(20)から導かれることになる。

- (19) a. John said that he would win.
 b. John expected that he would win.
 (20) a. John said, ["I will win."]
 b. John expected, ["I will win."]

29) Kuno (1972) では「Direct Discourse Analysis」。

30) Kuno (1972) では「Direct Discourse (or direct feeling) representations」。

31) 「英語の expect「期待する」、claim「主張する」、remember「覚えている」、know「知る」、ask「訊ねる」の様な動詞」(久野 (1978: 266))

久野（1978）は、引用の構文に直接話法分析を仮定する根拠として、間接引用句の人称制限をあげている。例えば、(21)の対比は深層構造において直接発話を仮定することにより、初めて説明が可能であるとする³²⁾。

- (21) a. John claimed that *he* was the best boxer in the world.
 b. *John claimed that *John* was the best boxer in the world.

(22) John claimed, ["I am the best boxer in the world."]

また、引用句の再帰代名詞-self は、その指示対象が話し手 1 ((23)a) と聞き手 1 ((23)b) の時は成立するが、その指示対象が第三者 ((23)c) のときは成立しない³³⁾。

- (23) a. John said to Mary that it was impossible to prepare *himself* for the exam.
 b. John said to Mary that it was impossible to prepare *herself* for the exam.
 c. *John said about Mary that it was impossible to prepare *herself* for the exam.

これも、その深層構造に(24)のような直接発話があるからであり、直接発話を設定できない(23)c は非文になるとした。

- (24) a. "It is impossible to prepare *myself* for the exam."
 b. "It is impossible to prepare *yourself* for the exam."
 c. *"It is impossible to prepare *herself* for the exam."

このように「直接話法分析」により間接引用における人称制限を統一的に説明することが可能である。久野（1978）は主に英語のデータを使って分析しているが、日本語の間接引用にも同様の分析が可能である³⁴⁾。

3-3 場の二重性

久野（1978）が「直接話法分析」により統語的な分析を試みているのに対し、砂川（1987）は「場の二重性」という言葉を使って語用論的な分析を試みている。久野（1978）も砂川（1987）も、引用の構文が一文の中に二つのレベルを持っており、そこに引用の特徴があるとする点では一致している。しかし、砂川（1987）は、主に日本語の引用を扱っている点と、「場の二重性」という観点からより語用論的に引用を捉えている点で特徴がある³⁵⁾。

32) 「このような直接話法表現に現れる I は、主文の主語が三人称であれば間接話法化によって He または She となる。この I は代名詞以外の名詞句（主文の主語の名詞句）で置き換えることはできない。」（久野（1973: 204））

33) 「主文の主語の発話、思考、感情を表す目的節の中で、その発話、思考、感情の話し手（発話者、思考者、経験者）と聞き手を指す名詞句が第三者を指す名詞句とは異なった特徴を示す。」（久野（1978: 271））

34) 「直接話法分析」の日本語への応用については、久野（1973: 191-206, 1978: 266-281, 1988）を参照。

35) 藤田（2000d: 49-50）は「場の二重性」を次のようにまとめている。



- (25) 引用するということは、ある発言の場ないしは思考の場で成立した発言や思考を、それとは別の発言の場において再現するということである。したがって引用文³⁶⁾にはその文の発言の場と引用句に表された内容が発言ないし思考される場といった二つの場がかかわってくることになる。(砂川 (1989: 363))

そして、砂川 (1989) は(25)の観点から分析を進め、伝達者の解釈が関わる機能的制約を指摘している。日本語の引用に対する機能的分析として先駆的なものであるので、簡単に概観しておく。

まず、砂川 (1987) は、引用の構文を整理し、(26)(27)は入れ子型の構造 (場の二重性) を持つが、(28)は単層型の構造であるとする。

- (26) 太郎は花子に旅行に行こうと誘いかけたらしい。
(27) 私は旅行に行こうと思います
(28) 昨晚雨が降ったと見える。

そして、「場の二重性」を持つ引用の構文(26)(27)に独特の振る舞いがあることを、ダイクシス、モダリティの関わりの中で論じている。

例えば、(29)では第1場 (元の発話場面) における「君」が第2場 (引用の場) でも「君」として表現されている。

- (29) 太郎は「君にこれをあげるよ」と言った。

第2場 (現在の発話) において「君」とは現在の話し手 (「私」) のことである。このような分裂的な表現は引用の構文独自のものである。そして、このような分裂を回避するために、次のようにダイクシスを調整して表現することが可能である。

- (30) 太郎は私に それをくれる と言った。

砂川 (1989) では、上のような述べ立てや意思表示の文の引用では、人称代名詞、指示詞、時の副詞、ダイクシス動詞などの調整が可能とする。砂川 (1989) は他に次のような例をあげている。

- (31) a. 彼は「あした君のうちにいきたいんだ」と言った。
b. 彼は 今日 私のうちに来たい と言った。
(32) a. 彼は「あしたは彼女に会いに行くことができる」と思った。
b. 彼は 今日 私に会いに来ることができる と考えた。

しかし、このような伝達者による解釈は、常に可能ではない。引用句の中で機械的な調整

↙ (i) 文の表現は、それが生み出されると意識されるある時点・ある地点におけるある発話者の関係把握、すなわちある「場」での表現の秩序に即して統一される。ある一文の発話の場にそれと違う場の秩序が持ち込まれることは極めて異例のことで、まず「引用」だけの現象であろう。
36) 砂川 (1989) の「引用文」は、現在の発話である「引用の構文」のこと。

ができない例として、砂川（1989）は次のような例をあげている。

- (33) a. 父は「あいつに金を送ってやれ」と母に向かって言ったそうだ。
 b. 父は 俺に金を送ってやれ と母に向かって言ったそうだ。
 c. *父は 俺に金を送ってくれ と母に向かって言ったそうだ。

また、次のような質問文や命令文の引用でも、引用句のダイクシス動詞は元の発話で用いた形式が優先されるとしている。

- (34) a. 彼は「あしたの午後來られますか」と聞いた。
 b. 彼は 今日の午後來られるか と聞いた。
 c. ?彼は 今日の午後行けるか と聞いた³⁷⁾。
 (35) a. 彼は「あした来て下さい」と頼んだ。
 b. 彼は 今日 来てくれ と頼んだ。
 c. ?彼は 今日 行ってくれ と頼んだ。

(30)～(35)におけるダイクシス調整の非対称について、砂川（1989: 372）は、語用論的な制約によって説明しようとする。すなわち、(30)～(32)など「述べ立て」や「意思表示」の文の引用と、(33)～(35)など「命令」「質問」「依頼」など伝達者の行動を指示するタイプ（行為指示型の文）の引用では、同じように調整を受けるわけではない。

このように「場の二重性」という観点から引用の構文を見ることで、単文だけを見ていては気づかない言語現象を捉えることが可能となる。それゆえに、引用の構文は日本語学の研究テーマとなってきた。

4. 引用の構文

4-1 日本語の引用研究

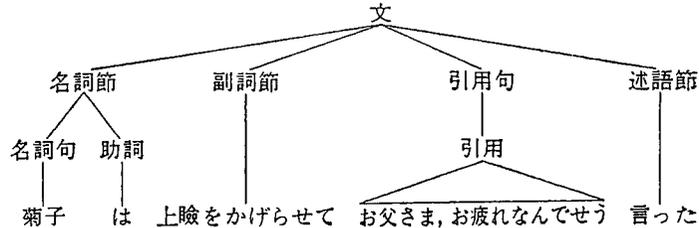
日本語の引用研究は、三上（1953）等に先駆的なものが見られるが、奥津（1970）から本格化したと見るのが一般的である³⁸⁾。これは生成文法の立場に基づく理論的な研究であった。前節（3節）で概観したように、引用の構文は次のように時間的に前後する二つの場の統合である。引用の研究はこの特殊な構造を扱うことになるが、理論言語学はこれを補文（complement clause）の問題として統語的に処理しようとした。例えば、柴谷（1978: 80）は、引用の構文(36)は深層構造から統語的に派生されるとしている³⁹⁾。

37) (34)cの「?」は、(34)aと(34)bは同義だが、(34)aと(34)cが同義ではないことを示す。

38) 日本語の引用研究史は、奥津（1993）、鎌田（2000b）、藤田（2000d: 613–624, 2001a, 2002b）、砂川（2001）に概略がまとめられている。また、草創期の引用研究については藤田（2000b, 2001b, 2002a, 2004）が参考になる。

39) 「引用標識挿入規則」（柴谷（1978: 90））

- (36) 菊子は上瞼をあげらせて、「お父さま、お疲れなんでせう。」と言った。(川端『山の音』)



図⑨

日本語の引用は、こうした構造的アプローチ (Nakau (1973), 井上 (1976) 等⁴⁰⁾) の他にも、機能的アプローチ (久野 (1978: 266–281), 牧野 (1980: 189–194) 等), 記述的アプローチ (仁田 (1980: 175–192), 寺村 (1981: 146–149) 等) など、様々な立場から部分的には論じられてきた。しかし、引用の構文を中心に据えた研究は主に八十年代に見られるようになる。

八十年代から本格化した引用の研究は、遠藤 (1982), 廣瀬 (1988b), 鎌田 (1983), 藤田 (1986), 砂川 (1987), 山本 (1987) 等, 主に意味論・統語論からの記述的・理論的な研究であった⁴¹⁾。筆者の引用研究との関わりから言えば、引用の語用論的な側面を重視し、「場の二重性」という観点から考察を進めた砂川 (1989) に注目したい。その砂川 (1990) は、引用の構文を次のように定義している。

- (37) 引用の文法論で中心的な対象となるのは、引用句を伝達する場 (伝達の場合) とその発話 (ないしは思考) の場が一つの文の中に取り込まれた構文、とりわけ「～と」という引用句とそれを必須補語として受け止める動詞から成る次のような構文である。

～と言った／聞いた／命じた etc.⁴²⁾

これら意味論・統語論的立場の他に、メイナード (1997), Sakita (2002), Kamada (1990) 等による談話分析, 日本語教育の立場, またビルマン (1988), 渡辺 (1997), 福畠 (1997), 中西 (2004) 等による対照言語学の立場なども加わり, 引用論は現代日本語における文法研究の中で盛んに研究されている分野の一つである。

40) 構造的アプローチについては Lee (1995) に詳しい。

41) 近年では, 山崎 (1993), 前田 (1995), 鎌田 (2000a), 藤田 (2000d), 砂川 (2003), 渡辺 (2003) 等。なお, 藤田 (2000d: 635–646) に詳細な「引用関係研究文献目録」がある。

42) 引用には次のような「思考」に関するものもあるが, 本稿では扱わない。

(i) お前, わしを生け捕りにしようと思ったであろう。(『北斗』)

4-2 引用研究の展望

4-2-1 構造的引用論と機能的引用論

これら八十年代から現在に至る引用研究の集大成的な意味を持つと思われる二つの研究が、近年公刊された。それは、国語学の伝統に基づく構造的（記述的）な研究である藤田（2000d）と、引用を伝達者による「創造」と機能的に捉える鎌田（2000a）である。前者を「構造的な引用研究」、後者を「機能的な引用研究」とする。以下で概観しておく。

まず、藤田（2000d）は引用句と引用動詞の文法とその意味の関係を記述していく研究であり、詳細かつ膨大な言語データを扱っている。これは言語事実の記述に専念した実証的な研究である。ただし「大切なのは、事柄がどの分野で論じるべきものかを明確にし、位置づけていくこと（藤田（2000c: 87））」とする藤田（2000d）は、その分析対象を「統語論（文法）」に限定する点に特徴がある⁴³⁾。藤田（2000d: 15）による「引用」の定義をあげておく。

- (38) (統語論における「引用」とは、) 所与と見なされるコトバを再現して示そうという意図・姿勢で用いられる引用されたコトバの表現であり、引用されたコトバが、引用（＝再現）されたものという表現性に基づく意味－文法的性格に拠って、文の構成に参与しているもの、それを含む構造。(ということになる。)

それに対し、鎌田（2000a）は「引用」を場のコンテクストにおける伝達（創造）と語用論的に捉え、社会言語学的なレベルや尺度を駆使して分析を加えている。分析対象について禁欲的であった藤田（2000d）に対し、鎌田（2000a）は引用を「文法論」「語用論」「文体論」の境界線上における言語現象と広く捉えている。統語論の枠にとどまらず、コードスイッチ、第二言語習得（誤用分析）、文体論にまで広く目配りした理論的な研究である。鎌田（2000a: 17）による「引用」の定義をあげておく。

- (39) 引用とはある発話・思考の場で成立した（あるいは成立するであろう）発話・思考の場を新たな発話・思考の場に取り込む行為である。そして、「話法」とはその行為を表現する言語的方法のことである⁴⁴⁾。

藤田（2000d）が引用を「再現」、鎌田（2000a）がそれを「創造」と捉えるなど専門的な差はあるものの、扱っている言語データに大きな違いはない。「場の二重性」というやっかいな性質を、藤田（2000d）は自らの立場を「統語論」に限定し、文法と意味の関わりを丁

43) 「文法論としての引用研究」は、次の二つの領域に区別される（藤田（1998, 2000d: 180））。

(i) 引用されたコトバ・引用句を含むシンタグマティックな構造

(ii) 引用されたコトバのパラディグマティックな対立

44) その「言語的方法」を「言語環境（引用表現とそれを取り巻くコンテクスト）」から記述・分析するのが「引用句創造説」である（日本語の引用表現は、元々のメッセージを新たな伝達の場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まる）。（鎌田（2000a: 8, 60-61））

寧に記述する中で消化しようとする⁴⁵⁾。それに対し、鎌田（2000a）は伝達の場合における発話の生成という理論的立場から、コミュニケーションを視野に入れた広い範囲からの分析を試みている。

4-2-2 話法についての対立

4-2-2-1 藤田（2000d）の話法

二つの立場は、引用研究における構造論と機能論であり、その主張はさまざまな点で対比的である⁴⁶⁾。そのすべてについて触れることはできないので、話法に関する対比を取り上げ、簡単に見ておきたい。

ここでは、次のような発話を引用する場合を例に考えてみる。

(40) 太郎「その味がいいね。」

引用を静的なデータととらえる藤田（2000d: 147-154）は、文法的な範疇として直接話法と間接話法を次のように二分法的に区別する。

(41) 太郎は その味がいいね と言った。〈直接話法〉

(42) 太郎は この味がいい と言った。〈間接話法〉

話法に関する藤田（2000d）の定義は、以下の通りである。

(43) 直接話法の表現とは、伝達のムードを伴う「生きた」文を引いてくる形の表現であり、間接話法の表現とは、「生きた」文が伝達のムードを失って、全文の話し手からの秩序に従い、引用構文全体の中の一部へと従属させられたもの。（藤田（2000d: 151-152））

この定義は極めて明確であり、曖昧なところはみじんもない。要するに、日本語の話法は引用されたコトバが感動詞や終助詞など「伝達のムード⁴⁷⁾」を持っているか否かによって峻別できるとする立場である。

(44) 「[引用されたコトバ・伝達ムードあり]」ト 〈直接話法〉

(45) 「[引用されたコトバ・伝達ムードなし]」ト 〈間接話法〉

4-2-2-2 鎌田（2000a）の話法

それに対し、より動的に言語使用として引用をとらえる鎌田（2000a）は、その区別は曖昧なものであり段階的なものとしている。そして、直接話法と間接話法の連続性の中から中間的な話法が導かれる。

45) 藤田（2000d: 548-549）は「場の二重性」を引用における単なる事実・特徴とし、「直接話法」を規定する文法用語としての位置づけしか与えていない。したがって、これを本稿のように引用における説明原理とはしていない。

46) 引用句の位置づけ、引用の定義、話法の区別等に相違点が見られる。詳しくは、藤田（1996, 2000ac, 2002c）、鎌田（2000a: 13-49, 117-155）を参照。

47) 鎌田（2000a: 164）はこれを「衣掛け（スタイル）のモダリティ」と呼び、それがダイクシス変換など間接化をブロックし、直接引用句を導くとしている。

ここでも元の発話(40)を引用する場合を考える。直接引用について鎌田(2000a)は(46)aだけでなく、(46)bのような引用に注目した⁴⁸⁾。

- (46) a. 太郎は、その味がいいねと言った。＜直接引用＞
 b. 太郎は、その味がいいと言った。＜準直接引用＞

(46)は引用句におけるダイクシスの未調整(「その」)から、どちらも直接引用であることは間違いない。しかし、(a)に比べると(b)は書き言葉的(教科書的)で「劇的効果(Dramatic effect)の欠如」が見られる。鎌田(2000a: 156-164)は、これを「準直接引用(Semi Direct Quotation)」とする。

また、(40)の間接引用について、鎌田(2000a)は(47)aだけでなく、(47)bのような引用に注目した⁴⁹⁾。

- (47) a. 太郎は この味がいいと言った。＜間接引用＞
 b. 太郎は この味がいいねと言った。＜準間接引用＞

(47)は引用句におけるダイクシスの調整(「この」)から、どちらも間接引用であることは間違いない。しかし、(b)は引用句の中に伝達者の視点(「これ」)と元話者の視点(「ね」)という二つの視点が入り交じる中間的な表現である。だから、(a)に比べると(b)は間接化の度合いが低いとし、鎌田(2000a: 117-156)はこれを「準間接引用(Semi Indirect Quotation)」とする⁵⁰⁾。

4-2-2-3 カテゴリー、プロトタイプ

藤田(2000d)による話法の区別はカテゴリー的であるが、鎌田(2000a)のそれはプロトタイプのとも言えるだろう⁵¹⁾。それはどういうことか。

カテゴリーは客観的な意味素性の集まりによって定義され、カテゴリーの成員であるか否かはある意味素性を持つか持たないかによって決まる。話法を二分法的に区別できるとする藤田(2000d)は、「伝達のムード」をその意味素性とし、それを持つか持たないかで話法が明確に区別できるとする。ちょうど「未婚者」の意味素性として[未婚]があり、その有無

48) 鎌田(1988)による例は以下の通り。

- (i) 昨日、スバル座で映画を見た後、ラーナーさんは
 a 明日も見に行くだろうねって言っていましたよ。＜直接引用＞
 b 明日も見に行くだろうねって言っていましたよ。＜準直接引用＞

49) 鎌田(1988)による例は以下の通り。

- (i) ねえ、ねえ、知子さん、電話で(友達に)相談したらね、賛成してくれてね、この辺りにも顔が広いからお弟子さんを
 a (私に)紹介してくれる、って言うのよ。＜間接引用＞
 b (私に)紹介してあげる、って言うのよ。＜準間接引用＞

50) Kuno(1988)は、引用句が直接話法要素と間接話法要素から構成されている次のような構文を複合話法(Blended discourse)と呼ぶ。

- (i) 太郎が ヤツの家にすぐ来いと電話をかけてきた。

51) 「カテゴリー的」「プロトタイプの」(早瀬(1996: 27-54)参照)。

からある人が「未婚者」か「既婚者」かを明確に区別できるようにである。カテゴリー的に見る限り区別は一義的になされるから、「既婚者」であり「未婚者」でもあるような中間的な人間は存在しない。

それに対して、鎌田（2000a）は直接話法に典型と非典型の間で連続性があり、間接話法も同様であるとする。ちょうど「鳥」という概念がコマドリのような典型的なもの（プロトタイプ）からペンギンのようなそうでないものへと連続的に捉えられるようにである。結果的に、直接話法と間接話法はそれぞれの非典型を通じて連続的に捉えられることとなる⁵²⁾。鎌田（2000a: 96）はそれを「引用句創造のプロセス」として次のようにまとめている⁵³⁾。

- (48) 直接引用 ←-----→ 間接引用
 新たな（元）発話の創造 （元）発話の伝達の場合への吸収
 [直接／準直接 準間接 間接 なんだって そうだ らしい ようだ]

そして、その連続性の中から話法、伝聞、様態表現は伝達者よりの視点の強弱から、上のようなスケールの中で統一的に捉えられるとする。このような議論の帰結として、鎌田（2000a）では、次のような文までが「引用」として分析の対象となる⁵⁴⁾。

- (49) a. 美津子の結婚式には背広で出てくれるそうですな。（『日の出』）
 b. オレの父さんもけっこうええ奴やっらしいで。（『番外篇』）

鎌田（2000a: 17）は「日本語の場合、引用は助詞「と」を伴って行われることもあれば、そうでないこともある」としており、藤田（2000d）が扱うような「～ト」で導かれる引用句だけでなく「『～そうだ』というような伝聞表現や『～するように言われた』というような表現」も「引用」であるとしている。したがって、藤田（2000d）に比べ鎌田（2000a）の扱う引用の範囲は極めて広い。これは「引用論」の枠組みとしての「～ト」引用句を飛び越え、分析対象を大きく広げていくことを意味する。

こうした見方に対して、統語論としての「引用論」を追求する藤田（2000d）は、文法的なカテゴリーである話法を(48)のような連続性で捉えることは、レベルの混同であり意味がないとする⁵⁵⁾。話法はヴォイスにおける「能動」と「受動」のように対立して捉えられるか

52) これは、要するに言語事実を連続性で捉えるということであり、寺村（1982）以後の「日本語記述文法」によく見られる考え方である（野田（他）（1991））。それに対して、藤田（2000d）はやはり国語学的だと言えると思う。

53) (48) は、鎌田（1988）を参考に筆者が一部改変したもの。

54) 鎌田（1988）による例は以下の通り。

(i) 母：何だったの？

太郎：明日、花子が帰ってくるって。／そうだよ。／らしいよ。

55) 「基準の設定次第で、物事を連続的なもの・一連のもの（＝類）にとらえることは、どのようにも ↗

からこそ意味があり、連続したものと捉えることはこの文法的カテゴリー（それを規定する意味素性）を無意味なものとするからである。「未婚者」と「既婚者」がある意味素性によって明確に峻別できたように、直接話法と間接話法も「伝達のモード」によって明確に区別できるとするのが藤田（2000d）の話法論である。一方、鎌田（2000a）は「未婚者」にもそれらしい人とそうでない人がいるように、直接話法と間接話法の中にそれぞれ典型と非典型で連続性を見る。

言語観の異なる二人の論争は、どちらも正しいから着地点がない。「既婚者」「未婚者」の区別を例にすれば、峻別できるという見方も正しいが、連続性があるとする見方も正しい。したがって、論争に決着がつくことはないだろう⁵⁶⁾。扱っている言語データの質、量ともに藤田（2000d）には圧倒されるが、言語学における構造論と機能論が相補的であるように、引用研究においても二つの立場は相補的になっていくと思われる。日本語の引用論は、今後この二つの対立軸に収斂しつつ発展していくと思われる⁵⁷⁾。

4-3 引用研究における本稿の位置づけ

藤田（2000d）、鎌田（2000a）は、それぞれ異なった立場から日本語の引用を扱っており、そこから得られる知見の多いことは言うまでもない。しかし、筆者が不満に思ったのは、砂川（1987）以来引用における「場の二重性」が意識されているのにも関わらず、これまでの引用論が発話行為を正面から捉えることなく行われていることである。

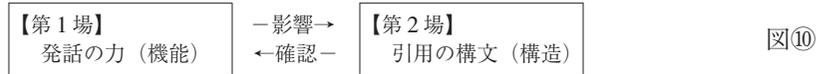
- (50) 引用するということは、ある発言の場ないしは思考の場で成立した発言や思考を、それとは別の発言の場において再現するということである。したがって引用文（筆者注・引用の構文）にはその文の発言の場と引用句に表された内容が発言ないし思考される場といった二つの場がかかわってくることになる。（砂川（1989: 362））

筆者が試みる「発話行為的引用論」は、この「場の二重性」を前提とし、元の発話の「力」（または発話の機能）に配慮しつつ言語データを考察する⁵⁸⁾。そして、引用の構文の各構成

可能だろう。しかし、あえて右のような表現（筆者注・例えば（48））を間接化の程度の違う「間接話法」だと一括りに見たところで、それは言語に内在する性質を究明するのではなく、言語事実に用意した枠を押しつけたにすぎない。」（藤田（2000a））

- 56) その点、人文科学の論争は自然科学と異なる。なお、物理学における「光」の正体のように、それが粒子であるか波であるかを一義的に決められない場合もあり、どちらも正しい（粒でもあり波でもある）ということが自然科学でもあるようである（バイス（2001: 45-68））。
- 57) 二つの議論は相補的であるから、個人的には藤田（2000d）を通してみることで鎌田（2000a）の主張はより明確になるし、鎌田（2000a）を通すことで藤田（2000d）の主張もより明確になるように思う。その意味で藤田（1996, 2000ac, 2002c）は鎌田（2000a）の理解にも非常に有効である。藤田（2000d）をより理解するためにも鎌田（2000a）からの再反論を待ちたい。
- 58) 藤田（2000d: 548）は「場の二重性」を意味論・統語論的な概念として扱っているが、筆者の引用研究ではこれをより語用論的に図④の枠組みの中で扱う。

要素に見られる言語的な反映を捉えることを目的としている。すなわち、第1場における発話の力（機能）と第2場における引用の構文（構造）の相関を扱う。特に第2場における伝達者の解釈が言語形式にどう反映されるかを考察するものである。



発話行為論は語用論の主要な理論の一つであるから、「発話行為的引用論」は、引用を言語使用の問題としてより広い立場からとらえようとする鎌田（2000a）の立場に近い。ただし、鎌田（2000a）が、社会言語学、談話分析、第二言語習得論といった科学的に権威化され、きらびやかな理論的背景を持っているに対し、筆者はやや古色蒼然としたオースチンの発話行為論の立場から分析を行う。言語研究において発話行為の存在は無視できないが、「場の二重性」という特徴を持つ引用の構文を扱う引用研究においても同じことが主張できると思われる。

5. 発話行為的引用論

5-1 筆者の試み

筆者の引用研究は、引用の構文を「発話行為の観点から考える」ことである。筆者はこれを「発話行為的引用論」として「発話の力から見た引用のメカニズム」を考察する⁵⁹⁾。なお、山梨（1991, 2002: 225）が発話行為の観点から見た引用論の論点（crucial-issues）を次のようにまとめている。

(51) 発話行為的引用論の論点⁶⁰⁾

- (a) 発話の力が引用部にどのように組み込まれているか⁶¹⁾？
- (b) 発話の力が伝達部（特に引用動詞）にどう反映されているか？
- (c) 伝達部の機軸となる引用表現としてはどのような動詞が可能か？
- (d) 引用部と引用動詞の命題的意味はどのように関わっているか？⁶²⁾

59) 英語の引用を機能的に扱ったものには、他に牧野（1980: 189–194）、Uchida（1981）、Sternberg（1982）、山口（1992）、内田（2000）など。

60) 山梨（1991, 2002）の引用論は英語を対象としたものである。また、「発話行為的引用論」という名前は筆者による。

61) Yamanashi（2002）は、自然言語における引用（quotation phenomena）を「引用部（quoted part）＋伝達部（quoting part）」と分けて考えている。

(i) He says, “I am happy.”

「引用部」は本稿の「引用句」（上の I am happy）、「伝達部」は引用構文から引用句を除いた部分（上の He says）である。

62) 藤田（2000d: 234–368）に遂行動詞の引用構文が記述的に整理されている。発話行為的引用論の論点（d）にあたると思われる。

中園（1994）では発話行為を次のように区別して考えた。発話行為には、約束、命令、報告などのようにその発話の力が持続的なものと、皮肉、罵り、挨拶のようにそれが一時的なものがある。

- ① 持続的な効果をもつ発話行為（SAC⁶³）
- ② 一時的な効果をもつ発話行為（SAT⁶⁴）

発話行為的引用論は引用句のダイクシスに焦点を当てつつ、発話の力から見た引用のメカニズムを考察する。それは(51)aに関わる研究である。だから、筆者の試みは、(51)に沿って言うのと次のようになろう。

- (a) 発話の力（SACとSATの区別）が引用部（引用句のダイクシス）にどのように組み込まれているか？

5-2 筆者が扱う言語データ

発話行為をSACとSATに区別する理由として、中園（1994）では次のような言語データをあげ、おおむね次のような主張を展開した。

まず、元の発話で遂行された発話行為の効果が持続的（SAC）である場合。例えば、次のような発話がそれにあたる。

- (52) 太郎「君 i は風邪だ。」

このとき、引用される場において元の発話の効果が続いているため、引用句のダイクシスは調整された後も指示対象が同じままで引用できる。

- (53) 太郎 t は 私 i は風邪だ と言った⁶⁵。

このとき、引用動詞を「診断した」と指定して引用してもよい⁶⁶。

- (54) 太郎 t は 私 i は風邪だ と診断した。

ただし、筆者が注目するのは、(52)を引用するとき(53)のように中立的な引用動詞（「言う」）を述語とし、引用句のダイクシスを調整することができるという事実である。

ところが、元の発話で遂行された発話行為の効果が一時的（SAT）である場合は、状況が異なる。例えば、次のような発話がそれにあたる。

63) 「Speech Act with Continuous Effect」を「^{エスエイシー}SAC」とする。

64) 「Speech Act with Temporary Effect」を「^{エスエイティ}SAT」とする。

65) (53)は、次のような解釈（直接引用）も可能である。

(i) 太郎 t は 私 t は風邪だと 言った。

しかし、直接引用で読むと元の発話を伝えていることにならず、引用が不成立である。引用を成立させるためには、(52)の「君 i」と(53)の「私 i」が同一指示の解釈（間接引用）でなければならない。

66) 引用動詞を語彙的に指定することを、伝達者が引用において「間接化の度合いを上げる」という。

(55) 太郎「君 iはスパイだ。」

このとき、引用される場において、元の発話の効果が消えているため、引用句のダイクシスは調整されない。もし、あえて調整すると、元の発話と引用句でダイクシスの指示対象が変わってしまう。

(56) ? 太郎 t は 私 tはスパイだ と言った。

(56)では、引用句の「私」の指示対象は元の発話の「君」ではなく、文全体の主語（主格補語）である「太郎」を指している（直接引用の読み）。しかし、(56)は直接引用で読むと元の発話(55)を伝えていることにならないため、引用が不成立となる⁶⁷⁾。

これは、図③において野手 No. 1 から野球のボールを受けた野手 No. 2 が、野手 No. 3 に対しテニスボールを投げたことに当たろうか。同じ野球のボールを投げる（引用を成立させる）ためには、(55)の「君 i」と(56)の「私 i」が同一指示の解釈（間接引用）でなければならない。

(56)の「?」から次のようなことが分かる。(55)のような発話を引用するとき、中立的な引用動詞（「言う」）を述語として引用句のダイクシスを調整することができない。もしダイクシスを調整して引用したければ、(57)のように引用動詞を「罵った」と指定してやらなければならない⁶⁸⁾。

(57) 太郎 t は 私 iはスパイだ と罵った。

このようにすれば語用論的に解釈され、「太郎」と「私」は別指示となり、間接引用として解釈される。しかし、引用動詞を語彙的に指定せず、中立的な「言った」を使って(55)を引用するときは、次のように直接引用するしかない。

(58) 太郎 t は 君 iはスパイだ と言った。

このように中立的な「言った」を使って引用するとき、引用句のダイクシスを現在の発話者（伝達者）の視点に調整できない発話が存在することに筆者は気づいた。これらの発話を引用するとき、元の発話者（話し手 1）の視点からしか引用することができない。

5-3 発話行為的引用論の帰結

発話行為的引用論は二つの発話が引用される時に見られる対比に注目する。例文を再掲して、発話行為的引用論の結論をまとめておこう。

(59) a. 太郎「君 iは風邪だ。」

67) (56)のように引用が不成立のとき、本稿では文頭に「?」を付ける。「?」は文法的な非文を意味するのではないので注意。引用句の「私」がダイクシスの調整を経ることで指示対象が変わってしまい、間接引用では元の発話を引用できないことを示す記号である。

68) 別の言い方をすると「間接化の度合いを上げないと引用句のダイクシスを調整できない」。

b. 太郎 t は 私 i は風邪だ と言った。

(60) a. 太郎「君 i はスパイだ。」

b. ?太郎 t は 私 t はスパイだ と言った。

(59)a を引用した(59)b では引用句の「私 i」が、依然として元の発話の「君 i」を指示可能であった。したがって、(59)b は間接引用として読むことができ、引用が成立している。ところが、(60)a を引用した(60)b では引用句の「私 t」が元の発話の「君 i」を指示することができない。したがって、(60)b は間接引用として読むことができず、引用が成立していない。発話行為的引用論では、この対比を次のように説明することを試みる。

発話の力が持続的である場合 (SAC), 引用されたときにもその効果が持続しているから、その発話の力を引用動詞で「診断した」と補う必要はなく、中立的な引用動詞 (「言う」) だけで十分に間接引用することができる。ところが、発話の力が一時的である場合 (SAT), 引用されたときにはその効果が消えているから、その発話の力を語彙的な引用動詞 (「罵った」) で補ってやる必要があり、中立的な引用動詞 (「言う」) だけでは不十分になる。

補足しておく。SAC の発話を引用するとき、引用の構文において次のように (a) から (b) へ遂行動詞を解除しても、(b) は依然として間接引用の解釈を維持できる。

(61) a. 太郎 t は 私 i は風邪だ と診断した。

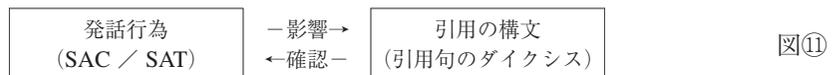
b. 太郎 t は 私 i は風邪だ と言った。

それに対し、SAT の発話を引用するとき、引用の構文において次のように (a) から (b) へ遂行動詞を解除すると、(b) は間接引用の解釈を維持できず、直接引用として読まれる。

(62) a. 太郎 t は 私 i はスパイだ と罵った。

b. ?太郎 t は 私 t はスパイだ と言った。

このように「発話行為的引用論」とは、引用の構文に見られる「場の二重性」を発話行為の遂行という観点から捉えなおすものである。そして、引用の構文に関わる統語現象 (引用句のダイクシス) を、発話行為の観点から機能的に分析することを試みる。まとめると次の通りである。



6. ま と め

「発話行為的引用論」は、思弁的に傾きがちな発話行為論に言語データ (統語論) による検証を導入し、再現性のある実証的なデータに基づいた新しい知見を発話行為論に提供する

ことを目的とする。例えば、中園（1994）では言語学の概念⁶⁹⁾を使って引用句のダイクシスに対して発話行為的な分析を展開し、元の発話が遂行している発話行為のタイプの違いがシンタクスに対比を生じさせていると主張した。このように発話行為的引用論は、言語使用の問題を対象としながら、言語データから発話行為を研究していく可能性を示すものである。

用例の出典

- 『礼儀』：山口瞳『礼儀作法入門』新潮文庫，24頁
 『北斗』：司馬遼太郎『北斗の人』講談社文庫，288頁
 『樅』：山本周五郎『樅の木は残った（下）』新潮文庫，84頁
 『ジム』：沢木耕太郎『王の闇』文春文庫，40頁
 『バー』：中島らも『今夜，すべてのバーで』講談社文庫，11頁
 『vs.』：『VS. 朝日新聞』朝日新聞社，45頁
 『日の出』：はるき悦巳『日の出食堂の青春』日本文芸社，172, 160頁
 『チェ3』：はるき悦巳『じゃりん子チェ』3巻，双葉社，42, 68頁
 『チェ13』：はるき悦巳『じゃりん子チェ』13巻，双葉社，207, 217頁
 『チェ14』：はるき悦巳『じゃりん子チェ』14巻，双葉社，193頁
 『piece3』：尾田栄一郎『One piece』3巻，集英社，190頁
 『piece4』：尾田栄一郎『One piece』4巻，集英社，13頁
 『番外篇』：『じゃりん子チェ番外篇』双葉社，9頁
 『デス』：平井和正（他）『デスハンター（下）』マンガショップ，18頁

参考文献

- ビルマン，オリビエ（1988）「間接話法の日仏比較対照 文中の会話文+「と」を中心として」『日本語学』7(9) 明治書院
 遠藤裕子（1982）「日本語の話法」『言語』11(3) 大修館書店
 藤田保幸（1995）「引用論における「話し手投写」の概念——所謂「話法」の論のために——」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院
 ———（1996）「引用論における所謂「準間接話法」の解消」『語文』65
 ———（1998）「引用論の二つの領域」『語文』71
 ———（2000a）「日本語の引用研究・余論——鎌田修への啓蒙的批判——」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学』49
 ———（2000b）「三上章の引用研究について」『滋賀大國文』38
 ———（2000c）「文法論としての日本語引用表現の研究のために——再び鎌田修の所論について——」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学』50
 ———（2000d）『国語引用構文の研究』和泉書院
 ———（2001a）「引用のシンタクス」『国文学 解釈と教材の研究』46(2)
 ———（2001b）「話法」の発見 奥津敬一郎の引用研究について」『滋賀大國文』39
 ———（2002a）「黎明期の引用研究 山田文法・松下文法の所説再読」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学』51
 ———（2002b）「話法論における連続相の問題 遠藤裕子の所説について」『滋賀大國文』40
 ———（2002c）「鎌田修著『日本語の引用』」『国語学』53(3)

69) 「間接化の度合い」「間接化のプロセス」「視点移動の原則」など。

- (2004) 「引用」をめぐって『国文学 解釈と鑑賞』69(1) 至文堂
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの＜意味づけ論＞ 日常言語の生の営み』紀伊國屋書店
- 福高教隆 (1997) 「日本語とスペイン語の引用と話法」『日本語とスペイン語(2)』くろしお出版
- 早瀬尚子 (1996) 「カテゴリー化と認識」河上誓作 (編) 『認知言語学の基礎』研究社出版
- 堀口純子 (1995) 「会話における引用の「ッテ」による終結について」『日本語教育』85
- 廣瀬幸生 (1988a) 「私的表現と公的表現」『文藝言語研究・言語篇』14 筑波大学
- (1988b) 「言語表現のレベルと話法」『日本語学』7(9) 明治書院
- 細江逸記 (1971) 『英文法汎論 (英文法統辭論提要)』篠崎書林 (原著1926年)
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店
- 岩男考哲 (2003) 「引用文の性質から見た「～ッテ。」について」『日本語文法』3(2) くろしお出版
- 鎌田 修 (1983) 「日本語の間接話法」『言語』12(9), 大修館書店
- (1988) 「日本語の伝達表現」『日本語学』7(9), 明治書院
- (1990) “Reporting Messages in Japanese as a Second Language.” *On Japanese and How to Teach It: In Honor of Seiichi Makino. The Japan Times.*
- (2000a) 『日本語の引用』ひつじ書房
- (2000b) 「日本語の引用」『日本語学』19(5) 明治書院
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- (1978) 『談話の文法』大修館書店
- (1988) “Blended Quasi-Direct Discourse in Japanese.” Poser (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax. Center for the Study of Language and Information.*
- Lee 風子 (1995) 『日本語の補文構造 Lexicase 文法理論による分析』くろしお出版
- 前田直子 (1995) 「トとヨウニ——思考・発話の内容を導く表現——」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』くろしお出版
- メイナード・K・泉子 (1997) 『談話分析の可能性 方法・理論・日本語の表現性』くろしお出版
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法』大修館書店
- 毛利可信 (1980) 『英語の語用論』大修館書店
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 中西恭子 (2004) 「現代朝鮮語の引用構文について」朝鮮語研究会 (編) 『朝鮮語研究 2』くろしお出版
- 中園篤典 (1994) 「引用文のダイクシス 発話行為論からの分析」『言語研究』105
- (2002) 「言語学における言語用法の位置づけ」『広島修大論集 人文篇』42(2)
- (2003) 「機能文法としての発話行為の役割」『人間環境学研究』1(1)
- (2005) 「発話行為の効果についての考察」『人間環境学研究』3(2)
- 中右実 (1973) *Sentential complementation in Japanese. Kaitakusha*
- 野田尚史・砂川有里子・益岡隆志 (1991) 「寺村秀夫著作解題」『日本語学』10(2) 明治書院
- 奥津敬一郎 (1970) 「引用構造と間接化転形」『言語研究』56 (『拾遺 日本文法論』ひつじ書房1996年)
- (1993) 「引用」『国文学 解釈と教材の研究』38(12) 学燈社
- パイス, アブラハム (2001) 『アインシュタインここに生きる』村上陽一郎・板垣良一 (訳) 産業図書 (原著1994年)
- 坂本百大 (1977) 『講座情報社会科学 4 言語と情報 I 現代における言語の哲学的構図』学習研究社
- (1978) 「訳者解説」オースチン (著) 『言語と行為』大修館書店
- Sakita, T. I. (2002) *Reporting Discourse, Tense, and Cognition.* Pergamon Press
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 砂川有里子 (1987) 「引用文の構造と機能——引用文の3つの類型について——」『文藝言語研究 (言語篇)』13
- (1988a) 「引用文の構造と機能 (その2)」『文藝言語研究 (言語篇)』14
- (1988b) 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7(9) 明治書院
- (1989) 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育(4)』明治書院
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』大蔵省印刷局
- (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 豊田昌倫 (1993) 「伝達部の構造と機能」『近代英語の諸相』英潮社

引用の構文に関する覚書

- 土屋 俊 (1980) 「言語行為論の展開——間接発話行為という話題をめぐる——」『月刊言語』9(12) 大修館書店
- 内田聖二 (1992) 「テキストとコンテキスト 語用論の射程」安井泉 (編) 『グラマー・テキスト・レトリック』くろしお出版
- 渡辺伸治 (1997) 「日本語の引用節について——間接話法, 直接話法そして視点——」『大阪大学言語文化研究』23
- (2003) 「引用節に現れる視点要素とスタイル要素の考察」『日本語文法』3(2) くろしお出版
- 山口治彦 (1992) 「繰り返せないことば——コンテキストが引用にもたらす影響——」『グラマー・テキスト・レトリック』くろしお出版
- 山本栄一 (1987) 「認識の様態と補文標識」『言語学の視界』大学書林
- 山梨正明 (1986) 『発話行為』大修館書店
- (1991) 「発話の力の観点からみた引用のメカニズム」『現代英語学の諸相 宇賀治正朋博士還暦記念論文集』開拓社
- (2002) “Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality.” *Essays in Speech Act Theory*. John Benjamins
- 山田友幸 (1987) 「言語行為の力と内容」『言語』16(13) 大修館書店
- 山内博之 (2002) 「日本語の引用句におけるダイクシスとモダリティの関わりについて」『実践女子大学文学部紀要』44
- 山崎 誠 (1993) 「引用の助詞「と」の用法を再整理する」『国立国語研究所研究報告集』14 国立国語研究所